

《新刊紹介》

山田憲太郎著『東亜香料史研究』

(中央公論美術出版 昭和51年2月刊 497+11頁)

荻 野 博

I

本書の著者山田憲太郎博士は、周知のように、日本ではほとんどただ一人といってもよい香料史の専門家であり、すでに多数の論著をおおやけにされているが、とくにここ数年来、従来の研究に再検討を加えられて、乳香、没薬、肉桂、胡椒、安息香等、諸種の香料についての研究を次々に発表されており¹⁾、その精力的活動ぶりは、まことに目を見はるものがある。本書はこれらの最近の研究にさらに補筆・修訂を加えられ、そのほか多数の香料類についての論考をも加えられて、一冊にまとめられたものであり、随所に旧説に対する批判や新たな見解の呈示が見られ、今後の香料史の研究に大きな光を投じてくれるものと思われる。また過去の香料は主として南海地方の僻遠の地に産し、しかも古代から近世にいたるまで、東西の文明世界において多大の需要があったため、東西間の貿易に重要な地位を占めてきた。その点で本書が今後の東西交渉史の研究に寄与するところは、けだし甚大なものがあるろうと考えられる。

「序」によれば、著者は学窓を出られてから20年ほど香料会社に勤務され、その間に「香料科学の知識と

商品としての体験」を豊富に身につけられたという。その点だけでも、一般の研究者とは異なった貴重な存在といえるが、その後さらに20年間にわたる研究生活の中で、日本、中国、インド、イスラム、ヨーロッパの諸史料を博く収集されて綿密な検討を加えられ、その上最近では東南アジア、インド方面に研究旅行を行われて、香料植物の実体やその生育状況、現地の地理的状况等についてつぶさに研鑽を積まれたのであって、その成果が本書となってあらわれたのである。

まず本書の目次をかかげておこう。

第一部 香料薬品を中心とする南海貿易の最盛期に

撰述された『諸蕃志』(志物)の香料の研究

緒言 第一章 竜腦(りゅうのう) 第二章 乳香(にゅうこう)と没薬(もつやく) 第三章 安息香(あんそくこう)と金顔香(きんがんこう) 第四章 篤耨香(とくどうこう) 第五章 蘇合香油(そごうこうゆ) 第六章 沈香(じんこう)・棧香(さんこう)・速暫香(そくざんこう)・黄熟香(こうじゅくこう)・生香(せいこう) 第七章 降真香(こうしんこう) 第八章 胡椒 第九章 竜涎香(りゅうぜんこう) 第十章 雑纂 結語

第二部 日本沈香志

第一章 推古天皇の三年に沈香が淡路島に漂着したということ 第二章 焼香供養の香炉から挙体異香 第三章 薫物と四季の匂い 第四章 沈すなわち香 第五章 香の木所(六国)と五味 第六章 香(こう)の限界

第三部 肉桂史の研究

第一章 古代オリエント・ギリシア・ローマのシンナモンとカссия 第二章 ペルシア語の *dār-čini* または *dār-čîn* とアラビア語の *dār-šini*, すなわちシナの木あるいは樹皮を意味する肉桂について

1) ここ数年来私が著者から贈られた論文だけでも、次のものがある。「聖書香料植物考(その1)——乳香と没薬——」(『名古屋学院大学論集』Ⅶの2, 1970), 「聖書香料植物考(その2)——シンナモンとカссия——」(同論集Ⅷの1, 1971), 「中国の胡椒時代(その1)」(同論集Ⅷの3, 1971), 「ローマ人とインドの胡椒」(同論集Ⅷの4, 1971), 「ペルシア語の *dār-čini* または *dār-čîn* とアラビア語の *dār-šini*, すなわちシナの木あるいは樹皮を意味する肉桂(*cinnamomum*)について」(同論集Ⅸの2, 1972), 「乳香・没薬小史——『諸蕃志』の記述を中心にして——」(同論集Ⅹの2, 1974), 「安息香小史」(同論集Ⅺの3.4, 1975), 「東西交渉史上の肉桂」(同論集Ⅻの1.2, 1975)。これらの論考に続いて本書を贈られたことを記して、著者の御好情に感謝申しあげる。

なお多くの章はそれぞれいくつかの節にわけられている。また巻頭には唐慎微撰、艾晟重修の『經史証類大観本草』所載の端州葶藶、広州肉荳蔻等12の草本の図、それに Acosta および Marsden の著書所載の Canela (肉桂)、胡椒などの図、計17の図版がおさめられている。また巻末には主要参考書目と略名、本草書目略年表稿、ユーラシア略地図、英文概説等が附せられている。なお中国の難解な香料名、人名、書名等々に読み仮名が附せられているが、これは後学の者にとって便利である。

以上によって、本書がきわめて膨大な内容を持っていることが、知られるであろう。これらのひとつひとつについて、その内容の紹介や論評を行うことは、なかなか困難である。ここでは著者がとくに詳細な論述をされている論考の中から、いくつかをとりあげて、その紹介をしてみたい。

II

第一部は、南宋のころ泉州において福建路の提挙市舶の任にあった趙汝^{かつ}适が、宋と直接間接に交渉のあった諸外国の事情を内外の貿易商人や船員などから伝聞したものに、さらに中国の古文献の調査をも混じえて、宝慶元年(1225)に撰述した『諸蕃志』の下巻(志物)に記載された輸入香料をとりあげ、そのひとつひとつについてその産地、性状、品質、用途、中国および西方への伝来、貿易の推移等々についての研究を行われたものであり、とくに中国に関する考証・研究がいずれの章でも主要な部分を占めている。このことは著者が「序」で「從來ともすればヨーロッパ人の香料上の見解にとらわれ東アジアへの伝播と歴史を説くのに對して、私はその誤りを正し、中国を中心とする独自の香の世界を能う限り跡づけ、中国人自体の生活の中に彼らの香料史を樹立しようとしている」(3頁)と述べられて、中国の香料使用がインドや西アジアやヨーロッパとどのように異なった姿を展開しているかを考察したいとされている著者の意図からして、当然のことであろう。いずれにしても第一部は、頁数において本書の70%を占めており、著者が最も力をいれた部分であるといつてよからう。

ところで「志物」に記載された品目は全部で47を数えるが、そのうちここでは著者が香料と考えられている23品目がとりあげられている。「志物」が当時最盛期にあった中国の南海貿易の輸入品の全部を網羅していたかどうかはともかくとして、記載された47品目中、

香料が23品目を占めているということは、当時の南海貿易において香料が最も重要な地位を占めていたことを物語ってくれるものといつてよからう。

いずれにしても『諸蕃志』は中国の南海貿易を研究する上で、最も重要な文献の1つであり、つとに研究者の注目をひいて、すでに1912年に Friedrich Hirth が W. W. Rockhill の助力をえて、その英訳に詳注を附した“Chau Ju-kua: His Work on the Chinese and Arab Trade in the twelfth and thirteenth Centuries, entitled Chu-fan-chi”をペテルブルグで刊行している。この書は東洋学上の不朽の名著の1つとして、その価値が高く評価されている。その後中国の馮承鈞が、ヒルトおよびロックヒルの注記を節録し、かつ関連する中国史料等を掲げ、さらに簡単な考察を加えた『諸蕃志校注』を1940年に長沙で刊行している。

このように『諸蕃志』については、すでに優れた研究が出されているのであるが、著者はヒルト、ロックヒル両氏の英訳注本が「絶大な努力の結晶として不朽の名著であることは確かである」とされながらも、「今日から見ればいろいろの難点を包蔵している」とされ、また両氏によって「すでにつくされているという人もあろう。しかし私は、私の香料史の研究から見ても、まだつくされているのではないと言いたい」(35頁)と考えられて、この研究を行われたのである。また著者は「欧米の学者は、ともすれば動植物学上の学名を比定することで満足している感がないでもない。しかし過去の時代の多くの商品では、正確な動植物学上の学名に該当する物資であるのかどうかは第二義的であって、実際に使用するとき、その品名が示すところに有用有効であればそれでよいのである。中国流にいうと、本草博物の上から、それであると認められる物であればよろしいのである。(中略)すなわち中国自体の本草学、とくに唐・宋代を中心に、それと前後するインド、アラビア、そしてヨーロッパの本草博物を参引して解釈を下してゆくことが必要である」(35～36頁)と、本書刊行の意図および研究態度を述べておられる。このような言は、著者が實際家および研究者としての多年にわたる体験から得られた貴重な見解であるといわなければなるまい。

著者はこのような意図および態度で、「志物」に記載された23の香料を次々にとりあげ、中国、インド、西アジア、およびヨーロッパの膨大な史料を縦横に援引されながら、論旨を展開されている。すなわちまずそれぞれの香料についての「志物」の記事が冒頭にかか

げられ、ついで当該香料について述べた葉庭珪の『南蛮香録』(1151年)、洪芻の『香譜』、陳敬の『新纂香譜』、その他の本草書の記事や『諸蕃志』より半世紀ほど前の周去非の『嶺外代答』、その他の諸文献の記事によって、「志物」の記事がなにによっているか、またどこまでが撰者の独自の記事であるかについての文献学的批判・考証が綿密に行われている。これによって23品目のうち、主として『南蛮香録』によったものが15、『南蛮香録』と『嶺外代答』とによったものが1、『嶺外代答』によったものが1であり、他の6品目は撰者自身の記録、すなわち彼自身の伝聞によったものであるとされている²⁾。

このように各香料について文献学的考察がまず行われたのち、各香料をめぐるさまざまな問題について、詳細な考察が展開されている。ここでは紙数の関係から、比較的詳細に論ぜられているもののうち、竜腦、乳香と没薬、沈香とそれに類する諸香料、ならびに胡椒に関する論考をとりあげて紹介してみたい。

竜腦 まず第一章の竜腦(camphor)は、16世紀以前の分布地域から推定して、大体赤道以北から北緯5度あたりまでの、マレイ半島南部、ボルネオ島北部、スマトラ島西北海岸の、海岸線に近い密林がその産地であったとされる。そして紀元前後からはじまるインド系民族のこの方面への進出の過程で、竜腦はまずインドに伝わり、さらにそこから中世のはじめごろ、ペルシア、アラビア方面に伝播したと考えられる。また東方の中国に対しては、唐代の659年になった『新修本草』にはじめてその詳細な記載が見られるので、いちおう7世紀の半ば以前に伝播したものであろうと推定されている。

次に唐末の段成式の『西陽雜俎』の婆利国および波斯国に竜腦香樹を出すという記事がとりあげられる。このうち波斯国産の問題については、ラウファールの南海の波斯説、竜腦の輸入がもっぱらペルシア船に独占されていたことに起因するとのヒルトおよびロックヒルの説、および竜腦に似た一種のカンフルがペルシアにあり、それはおそらくイブン・アル・バイタールのあげている arzaq であろうとするペリオ説などが

あるが、これらはいずれも退けられて、ササン朝の盛時以来、イラン系の諸要素が中国に多大の影響を及ぼし、東西の物資の転運もほとんど波斯人あるいは波斯系の人々の手を通して行われていたことから、段成式は波斯人から竜腦の採取についての話を聞いて、この記事がうまれたのであろうとの推定がなされている。また婆利国の竜腦については、婆利国を今日のバリ島に比定する通説は、この島に竜腦樹を産しないという致命的難点があるとして退けられ、『西陽雜俎』の婆利国でこの香を「固布婆律」と呼ぶとの記事に注目されている。そして「固布婆律」(ku-pu-p'o-lü)は「婆律の固布」であり、これは「カンフル・ポル」すなわち「ポルのカンフル」であると考えられ、このポルすなわち婆律は、賈耽の『道里記』の婆露国、義浄の『大唐西域求法高僧伝』の婆魯師国、イブン・ホルダーダーの Fansuri、スレーマンの Fančūr などに相当するものとされる。ところで今日スマトラ島の竜腦樹の産地は大体バルスより以南の地に限られており、上述の婆露、婆魯師をバルスに比定する説が有力であるが、バルスはマラッカ海峡を通過してインド洋に出る通路上にはないから、この比定は適当ではなく、むしろスマトラ島西北部に求めるべきであるとの推定がなされている。ただしこの方面は今日竜腦樹を産しないが、現在のこの樹の生育地帯は過去の濫伐によって甚だしく縮小されているのであって、かつてはスマトラ島の西北部沿岸一帯の地域にも生育していたと考えられ、ここが東西の交通路に面した便利な地帯であったために濫伐され、今日この地方ではその姿を消してしまったのであろうと推定されている。著者の着想はまことに興味深いものがあり、またその比定はすこぶる詳細かつ綿密で、相当に説得性があるように思われる。しかしこの方面の地名の比定については、これまでさまざまな説が出されているようであり、また著者自身も漠然とスマトラ島西北沿岸というだけで、あるいはマレイ半島の南西部沿岸までおよんでいたかもしれないとされているのであって、この問題についてはなお今後の研究に待たなければならないことも多いように思われる。

このほか渤(淳)泥(ブルネイ)、マレイ半島、および三仏齊(パレンバン)の竜腦について、また竜腦の採取と品種、値段と用途などについても詳細な考察が加えられており、さらに中国の樟腦の製法についても附記されている。

乳香と没薬 第二章では乳香(frankincense)と没

2) 『南蛮香録』によったものは竜腦・乳香・安息香・金顔香・篤耨香・蘇合香油・沈香・棧香・速暫香・黄熟香・生香・降真香・薔薇水・檀香・丁香、『南蛮香録』と『嶺外代答』とによったものは梔子花、『嶺外代答』によったものは竜涎香、伝聞によったものは没薬・胡椒・肉豆蔻・白豆蔻・華澄茄・腦腴臍である。

薬 (myrrh) がとりあげられる。著者はすでに昭和17年に出された『東亜香料史』(東洋堂)で、「薰陸香即ちアラビア乳香を中心とする樹脂香料の支那伝来」について論じておられ、早くから関心をもって研究されてきたものと思われる。乳香と没薬はアラビア半島の南西隅およびその対岸のソマリーランド地方を産地として、すでに古代オリエントやギリシア、ローマ時代から焚香や薬物として珍重されていた。したがって『聖書』や多数の古典作家の著作にもしばしば記述されている。そのためこの論考でも、『諸蕃志』の文献批判に続いて、「古代泰西の乳香と没薬」の問題がとりあげられる。まず「マタイ福音書」の記事によって、乳香は神、没薬は医師と考えられ、古代のオリエントでは金とならんで貴重なものとされていたことが説かれる。次に主としてプリーニウスおよび『エリュトラー海案内記』(以下『案内記』)によって古典古代の状況が解説される。またその産地に関して、ストラボンのソマリーランド沿岸の「香料地帯」の記事に言及されている。ストラボンは前3世紀のエラステネスおよび前2世紀末のアルテミドロスによって「香料地帯」の記述を行っているが、そこに記された乳香と没薬の産地は事実とは違うようで、「これはエラステネスの誤りをそのまま記述しているからである」とされ、『案内記』に記された輸出地が「この誤りをはっきり訂正している」(83頁)とされている。しかしエラステネスは没薬と肉桂産地について述べているだけで、乳香産地については述べておらず、またアルテミドロスの記述は西部から東部にかけて没薬、乳香、肉桂産地が順次にならんでいることを示しており、『案内記』の記述とそれほど大きな相違はないようにも思われるが、どうであろうか。

次は「中国の薰陸香」がとりあげられる。すなわち『諸蕃志』に乳香の別名とされている薰陸香の中国伝来やその実体はなにかという問題である。まず中国伝来の問題については、魚豢の『魏略』、晋の嵇含の『南方草木状』等から、薰陸香は中国では多分4世紀ごろから知られ、まず「大秦国海辺に出す西域伝来の樹脂系香料」として認められ、5～6世紀には南方海上経由のものも知られるようになり、さらに7世紀に入ると「インド産を中心とするもののように受け取られている」(88頁)とされて、薰陸香の産地に関する中国人の知識に変遷が見られたことが指摘されている。また薰陸香の実体に関しては、『魏略』に大秦国産、『後周書』や『隋書』に波斯産とあるので、アラビア乳香

が中心であると考えられやすいが、そのように単純なものではない、インドに輸入されたアラビア乳香や没薬が、西北インドやバルチスタン方面に産するブデルラ(インド没薬)およびインドの北部から南部にかけて産するクンズル(インド乳香)と混和されて薬品と香料にあてられていた(『案内記』には西北インドのバルバリコンにアラビア乳香が送られることが記されており、この書の英訳者ショッフはそこから中国方面へ送られたとしているが、著者はこれを退けて、インドで上述のように用いられたとされている)が、そのためそこにつくり出されたものは「まぎらわしいほどに混雑した芳香樹脂となり、中国人はこれら全体の樹脂を薰陸香と通称していた」(94頁)のだという、まことにユニークな推定がなされている。すこぶる興味深い見解であるが、それでは『魏略』に大秦国産とあるのは、どのように考えるべきであろうか。

次にアラビア乳香の中国伝来の問題がとりあげられ、まず乳香という名称についての検討がされている。すなわちこの名称は739年になった陳蔵器の『本草拾遺』に薰陸の一種と記されたのが最初の記述と考えられ、次いで『唐鑑真過海大師東征伝』に「常用乳頭香為燈燭」とあるので、南海貿易の発展に伴い8世紀の前半に乳香の名称が現われ、これは明白にアラビア乳香を指しているとされている。そして唐末から宋初にかけてアラビア乳香の輸入が増加してゆき、それに伴って本草書に乳香の薬物上の効能がしだいに詳記されてゆくが、産地は天竺あるいは南の波斯とするだけであり、したがって当時は中国ではまだ乳香の産地についての知識が十分ではなかったものと考えられる。しかし11世紀はじめの丁謂の『天香伝』は産地を大食国とはじめて乳香のアラビア産であることを記し、次いで12世紀半ばの『南蛮香録』は産地をアラビア南部と受け取れる記事を掲げ、さらに『諸蕃志』にいたってアラビア半島南部沿岸の麻囉拔、奴発、施曷が乳香産地であるとの明確な記述が現われることが、詳細に追求される。そして上記の3つの地名をそれぞれ今日の Marbat, Dhufar, マルコ・ポーロの Eshier に比定され、これらがいずれも乳香産地である南アラビアのドーファルもしくはその附近にあるとされている。こうして『諸蕃志』が書かれたころは、乳香が原産地のドーファル地方からインドの故臨(クイロン)、スマトラ島の三仏斉を経て中国に送られたことが明らかにされている。そしてこのように宋代、とくに南宋代に入ってアラビア乳香が原産地から盛んに輸

入されるようになったのは、「人口の大都市集中化の激増と、大都市の消費生活の異常な拡大向上」(99頁)によるものとされている。さらにこのような香料貿易の発展に伴い、南宋政府が香料薬品を専売品に指定して財政収入をはかったこと、朝貢貿易とならんで内外商人の私貿易が著しくなり、なかでも乳香の輸入が他の香薬品を抜いて数量的に圧倒的であったことなどが明らかにされ、他方北宋のころには西域方面からも陸路乳香がもたらされたことが指摘されている。さらに中国における乳香の用途についてもふれられている。乳香は東西ともに主として焚香として使用されるが、中国の代表的な焚香は後述の沈香である。ところが量的には乳香が沈香よりも多量に、「諸香料中で群をぬいて使用されている」、それにもかかわらず、乳香の用途についての「根本資料と事実」を求めることができないことが指摘され、その理由として「意外にも平凡な日常生活の中で、乳香だけを焚くことが流行していたのではなかろうか」とされ、乳香を焚くことが「都市庶民の日常の行事となっていて、特に注目値するほどのものではなかった」(107～108頁)のために、乳香使用のことがことさらに古書に記述されなかったのではなかろうかとの推測がなされている。

最後に没薬の中国伝来について述べられる。まず11世紀までの本草書などには、没薬を波斯国産とし、12世紀後半の『嶺外代答』にいたって、はじめて大食国中の物産の中に乳香とともにあげられていることが指摘される。そしてこのようなことになった事情について考察され、唐代以前にはインドのブデルラおよびクンズルを中心としたものが薰陸香としてもたらされ、次にその中に没薬という名の品種のあることが知られるようになったものと考えられ、それにはアラビア没薬との混和品、そのほか種々のものがあり、それらが宋代まで依然として入ってきたために、これを波斯産としてすこしも怪しまなかったのであらうとされている。そしてようやく南宋代に入って、原産地からの没薬が輸入されるようになったのであり、それ以前のは味がビッター(刺戟が強すぎる)で香気もなく、薬効も大したものではなく、薬物としてあまり重要視されなかったのではないかと推測がなされている。

以上が著者の乳香および没薬論の概要であるが、早いころ中国に伝来した薰陸香が、純粹なアラビア乳香ではなく、インドでブデルラやクンズルに混和されたものであったらうとのユニークな推論は、多少の疑問がないわけではないが、著者の多年にわたる体験と研

究の成果として、高く評価されるべきであらう。また宋代に入ってから乳香の莫大な消費の問題は、史料の制約もあり、なお今後の研究に待つべきものがあるように思われる。著者自身も当時の文学作品等に乳香使用の徴証が見出されることを期待されている。

沈香 次に第六章の沈香(gharu-wood)・棧香・速暫香・黄熟香・生香に関する論考に移ろう。ここでは以上の5香料が一括して扱われているが、それはこれらがいずれも同じ系統のものであるからである。そしてそのうち最も上質のものが沈香であり、したがってその論述も主として沈香を中心にして展開されている。

ところで日本を含む東アジアの香料は、焚香を主要なものとし、かつ焚香を代表するものが沈香であり、したがって文字通り「沈すなわち香」であった。沈香についてまずこのような解説がなされ、このことは梁の陶弘景が『神農本草經集注』を編した5世紀末から6世紀初めごろには認められていたとされている。また種々の香料をミックスして用いる合香も、唐初の『新修本草』の記述から見て、その中心をなすものはやはり沈香であったこと、他方沈香木一種——いわゆる沈一味——だけを焚いて、その発する幽玄な佳香を楽しむことが広く流行し、日本もその亜流であったことなどが指摘されている。

沈香木は中国の西南部と海南島、ベトナム、タイ、ビルマ、マレー、スマトラ、インドのアッサム、東ベンガルなど、熱帯の山地に生育するアキラリヤ属、その他数種の常緑喬木の樹幹のある部分に、なんらかの外傷その他の刺戟が加えられると、その部分だけに樹脂分が沈澱・凝集してできるものであるが、どの原樹にも生じるというものではなく、また採取にも多年の経験を要し、したがってなかなかえがたい香木である。インドでは早くから外傷の鎮痛剤などに用いられており、紀元前後にインド系民族がインドシナ方面に進出した結果、この方面の沈香木の採取が行われるようになったと考えられる。また中国では上述の陶弘景の記述から見て、すくなくとも彼以前に沈香のことを知ったものと思われる。またヒルト、ロックヒル、および馮承鈞は、晋の嵇含の『南方草木状』の沈香に関する記事を引いているが、この記事はその内容から見て唐・宋代の記述にもとづいて作為されたもので、3～4世紀のころの原文を伝えていないとされている。しかし『太平御覧』982所引の『南州異物志』(呉の万震撰)の沈香と棧香の区別に関する記事は、「既に原

初の文からあったと 考えて よろしい」(166 頁)とされ、また『後漢書』の賈琮伝に記された交趾産の異香・美木は沈香木を中心にしたものと考えられるとされて、「後漢時代以後になってまず西域から、そして次に南海からの香が段々に中国人に知られたのであろう」(187頁)と、中国伝来についての過程が詳細に跡づけられている。

次に唐・宋代の論述に移り、当時の本草書から、唐以前には大体沈香と棧香が区別されただけであり、またその産地はインドシナ、カンボジア、マレイ半島のものが使用されており、沈香伝播の主流が南海からであったことが知られること、しかし唐代に入ると、沈香・青桂・鶏骨・馬蹄・棧香の5品目、もしくはこれに黄熟を加えて6品目が知られ、また中国産の海北・嶺南諸地方(南恩・寶・高・管・羅・化・辯・雷)の沈香が採取されるようになり、さらに唐末から五代・宋初にかけては、海南島の沈香が知られるようになった過程が、詳細に跡づけられている。とくに宋代に入ると、海南島産のものが優品として重要視されていたことが指摘され、また海南島産の沈香・檳榔・吉貝(木綿)と沈香木などの採取に当るこの島の山地の住民の必要とする塩・鉄・塩乾魚・酒・穀類・陶磁器等の交易が泉州商人などの手を介して行われたことが、『桂海虞衡志』や『嶺外代答』によって明らかにされている。こうして南宋代には海北・嶺南、海南島、および南海(占城・真臘・三仏齊)の3方面から沈香が供給されるようになったことが、豊富な文献によって明らかにされている。

次に12世紀の後半から16~17世紀にかけて沈香木中の至宝として中国人が珍重した伽藍木(迦蘭香)、棋楠香(伽南木)の問題がとりあげられる。まずこれらの語の語源について、Crawford のマレイ、ジャワ語の kalambak, kalambah に由来するとの説、および杉本直次郎氏のサンスクリット語の kāla (黒) に中国語の「木」をつけたとする梵漢合成語説の2つについて検討され、杉本説が支持されるべきであるとされるが、さらにこの語がうまれてきた事情について考察が進められ、この名香を求めて占城におもむいた中国商人が、優品である黒色の沈香木を強烈に求めたところから、これを提供する占城の原住民と中国商人との間に「現地で発生した取引上の言葉(すなわち商品名)」(204頁)であったろうとの推定がなされている。

最後に西方世界の沈香についてもふれられている。すなわち沈香の名は西ヨーロッパでは「中世の商業帳

簿や関税表などにのっている」が、彼らの沈香に対する需要はごくすくなかったのであって、このことは「香料としての匂いが彼らの嗜好に合わなかった」(205頁)からであろうとされ、このことは大航海時代に入っても同様であったことが、ガルシア・ダ・オルタやリン スホーテンらの記事から知られるとされて、沈香の「最大の需要者は中国人であり沈香木は中国人のものであった」(209頁)と述べられている。

以上のように、沈香は中国で焚香としてとくに珍重され、沈香は中国人のものであったこと、中国では海北や海南島に沈香木を産しながら、その使用はまず南海方面のものからはじまったこと、唐から五代、宋にかけて海北、次いで海南島産のものが大いに使用されるようになったこと、やがて占城方面の黒色の優品がとくに迦蘭香などの名称で愛好されたことなど、沈香をめぐるさまざまな問題について、著者の独特な考察が展開されている。

胡椒 第八章では胡椒がとりあげられる。胡椒は西方ではローマ帝国時代の初期から、急速に調味料としての使用がたかまって、インドのマラバル産の胡椒が盛んに輸入されるようになり、以後東西貿易の主要な商品となったことは周知のとおりであるが、中国でも胡椒の消費は膨大な量に上っていた。この章ではまず『諸蕃志』『志物』の胡椒に関する記述が、上巻の「志国」の新拖・闍婆・蘇吉丹(いずれも今日のジャワ島の一部と考えられる)の3国に見られる胡椒の記事とともに、ほかに先蹤が見出されない独自の文であることが指摘され、これらの記事は撰者の趙汝适自身の独自の見聞にもとづくものであることが、まず強調される。次いでマルコ・ポーロの杭州、泉州などに関する記事が引用されて、当時極度の繁栄をとげていたこれらの都市の胡椒の消費量が莫大な量に上り、ヨーロッパ全体の消費量よりも中国のそれの方がはるかに大きかったと考えられ、かりにポーロのいう杭州市民の消費量を中国全体の消費量としても(1都市の消費量としてはあまりにも多いので)、その量は年間約1,500トンに達することが指摘されている。また16世紀末の『本草綱目』、宋代の『飲膳正要』等によって、中国人が古来使用していた調味料は、本来の香辛料(spice)というよりはむしろ薬味(herb)であると考えられること、とくに宋代以後薬味の使用が一段と進歩して、料物という中国独自のものが発達してくること、それとともに薬味に従来の葷辛類のほか、胡椒、葷撥(長胡椒)などの南海産の香辛料が加えられるようになる

こと、しかしこのような状況になっても、中国では依然としてヨーロッパのように香辛料が焚香料および化粧料とならんで香料の3大部門の1つを占めることはなく、薬物中の薬味料としてとどまり、調味賦香料として独立の一部門を形成することはなかったことなど、著者独自の見解が述べられている。

これに続いて胡椒の中国伝来の問題がとりあげられる。胡椒は『後漢書』にはインド産、『魏書』や『宋書』などには波斯産と記されているから、はじめはインドからイラン系の民族と国々を経由して、少量の胡椒がインドから中国に伝来し、貴重な医薬品として重宝されたと考えられること、6世紀前半の『齊民要術』には胡椒肉（白羊の肉の腸詰めと考えられる）の薬味として薑撥と胡椒を用いることが記されているから、唐以前にすでにインド産の胡椒と長胡椒がごくわずかであるにしても薬味として使用されていたと考えられること、他方南海産の胡椒に関しては、『海薬本草』に徐表の『南州記』を引いて、「生南海諸国、（中略）一云、向陰者（薑）澄茄、向陽者胡椒也」とあるが、徐表の『南州記』は徐衷の『南方記』（正しくは『南方草物状』）の誤記であるから、この書はすくなくとも6世紀以前の撰と考えられ、また薑澄茄、すなわち長胡椒は南海諸国産とある場合はジャワに限定されるので、そこに述べられた胡椒もジャワ胡椒であると考えられ、したがって5世紀のころジャワの長胡椒や胡椒が中国ではおぼろげながら知られていたものと推定されることなどが、述べられている。

その後南海産の胡椒の輸入は10世紀末から11、12世紀となるにつれて、しだいにその量を増してゆくが、そのころはアラビア乳香の輸入が群をぬいており、そのほか白檀・沈香・竜腦などが多量を占めて、胡椒の輸入は未だしの感があつた。ようやく12世紀の第4四半期に入って、『嶺外代答』が胡椒を閩婆の産のうちにあげているが、その半世紀後の『諸蕃志』にいたって「はじめてしかも突然にジャワ胡椒の明確で詳細な記事が出現」（236頁）することが指摘される。そして胡椒の産地としてあげられている新拖、閩婆、蘇吉丹はそれぞれスダ、東部ジャワ、中部ジャワに比定されるとされ、他方『諸蕃志』は胡椒産地である南インドの胡椒に関してはまったく沈黙していることから、当時の中国では胡椒はもっぱら東ジャワから輸入されたものと推定されている。またこの書に記された胡椒の生育地域、栽培状態、開花、結実、採集、乾燥等に関する記述はほぼ事実に近いものであることが認めら

れるとされて、「最初の産出地に関する記事としては、余りにも詳細でありすぎるようである」が、これは「中国大都市の消費生活、特に食生活が贅沢になって、胡椒に対する需要が急激に増大したためであろうとしか考えられない」（237頁）とされて、南宋代に入ってから胡椒の輸入が急速に増大したことが強調される。さらに当時中国の銅銭の密輸出が増加しているが、このことは胡椒の大量輸入と密接な関連があったと考えられること、また東ジャワの胡椒輸入を目的とする渡海に限って、政府がしばしば禁止していることが指摘され、胡椒の輸入が南宋政府にとってきわめて重大かつ深刻な問題となっていたとされ、同時にこうした状況であったから、貿易取締りの任にあった趙汝适の注意をひいて、胡椒に関する詳細な記事がうまれたものであろうと推定されている。

次に元代の汪大淵の『島夷志略』、さらに明代の馬歡の『瀛涯勝覧』などによって、元代以降の南海における胡椒産地の変化および貿易の推移が考察される。まず14世紀の前半2回にわたって南海各地を旅行した汪大淵は、ジャワの胡椒が年産万斤——著者はこれを多量を意味するものではなく、1万斤と解している——であること、ビルマ南部からマレイ半島北部にかけても胡椒を豊富に産すること、さらに南インドのマラバル海岸の下里（カリカット）が世界第一の胡椒産地であり、その南方の古里仏（クイロン）がこれに次ぐことなどを書いており、また彼は当時ペルシア湾入口の大貿易港であったオルムズとマラバル海岸との取引状況について、オルムズ船がアラビア乳香をバラストとして船底に積み、その上を獣皮でおおって数百頭の馬を乗せてインドの小唄喃（カリカット北方約20マイルの Fandaraina に比定）にいたり、戻り荷として胡椒を積んで帰ること、オルムズ船は甲板が2ないし3層の大型船で、他の商船の輸送分はその1/10以下であることなどの興味深い記事を残しているが、これらの記事にもとづいて、当時イスラム船が盛んにマラバル方面に來航して活発に貿易を行い、マラバル産の胡椒の大部分が西アジア、さらにヨーロッパ方面へ送られていた事情が明らかにされている。そしてこのことと関連して『島夷志略』の「較商舶之取、十不及其一焉」との記事がとりあげられ、この書の校訂を行った藤田豊八氏がこの「商舶」をシナ商舶としていることについて、若干の疑問を感じながらも、「当時大型のシナ船がマラバル海岸まで出かけ、西のオルムズ船と互いに東西の商品をバーターしていた」（240頁）という当

時の状況から見て、いちおう藤田説に従うことが妥当であろうとされ、13世紀初頭にはじまった中国のジャワ胡椒に対する需要が増大の一途をたどった結果、14世紀に入るとマラバル胡椒がたとえ1/10以下という少量にせよ、輸入されるようになったとの推定がなされている。

さらに明代に入ると、蘇門答刺に胡椒を産するとの『瀛涯勝覧』の記事がとりあげられる。この蘇門答刺は『島夷志略』の須文答刺、『元史』の速木都刺と同じく、今日のスマトラ島西北部の一地域だけを称したものであるが、15世紀以前の東西の文献でこの地方の胡椒を記したものの見当たらないところから、この地方の「胡椒の栽培は、早くて14世紀の末、あるいは15世紀の初めに始まった」(241頁)とされ、その栽培の開始は中国とインド両者の胡椒の需要の増加によるものであらうとされている。この時期については、さらに『瀛涯勝覧』をはじめ、費信の『星槎勝覧』や鞏珍の『西洋蕃国志』などが、いずれも東ジャワの胡椒についてまったく沈黙を守っていることがとりあげられる。そして大航海時代に入ってからの特メ・ピレスやデュアルテ・パルボサも、胡椒に関する詳細な記事を残しながら、やはり東ジャワの胡椒について記述していないことが指摘され、その理由として「スマトラ西北地域とジャワのスダの生産量が、15世紀になって急に増大し、かつての東ジャワをはるかに凌駕し」、「特にスマトラ西北部の躍進は驚異的であった」とされて、「このような変化が、胡椒の対外輸出用の積出地として東ジャワの地位を失わせた」(244頁)のであらうと推定されている。

以上のように胡椒に関して、中国人の独特の香料観やまずインド産、ついでジャワ産のものの伝来の形跡が認められること、その後胡椒の需要はあまりのびなかったが、宋代以降東ジャワ産胡椒の輸入が急速にたかまり、やがてその消費量はヨーロッパ全体のそれよりも大きくなったこと、さらに中国およびイスラム商人の胡椒貿易の発展に伴う産地の変遷など、まことに注目すべき考察が見られる。また元代まで盛んに中国に輸入された東ジャワの胡椒が、明代に入ると中国の文献から姿を消し、代ってインド方面にいたる航路沿いのスマトラ西北部などに胡椒の産地がおこってきたとの指摘も興味深いものがある。ただ東ジャワの胡椒が姿を消してゆく事情については、スマトラ西北部やスダの躍進によるとされているが、そのほかになにか別の理由、たとえば東ジャワ自体における情勢の変

化などはなかったのだろうか。

第一部には以上のほか、なお多くの香料についての論考が含まれている。とくに第九章の竜涎香(ambergris)については、著者はすでに旧著の『東西香薬史』(福村書店、1959年)において「竜涎香史序説」の題で詳細な研究を行っておられ、今回の研究はこれをさらに再検討されたものと思われるが、ここでは中世はじめにアラビア人が用いはじめたとされる、抹香鯨の体内から分泌されるこの香料について、1. アンバルと竜涎香、2. アラビア人とアンバル、3. 竜涎香の中国伝来、4. アンバルの東西転運、の4節にわけられて論旨が展開されていることだけを附記しておく。また第十章は「雑纂」の題の下に、梔子花(くちなしのはな, gardenia flowers), 薔薇水(しょうびすい, rose water), 檀香(だんこう, sandal-wood), 丁香(ちょうじ, cloves), 肉豆蔻(にくずく, nutmegs), 白豆蔻(びやくずく, cardamoms), 葶澄迦(ひっちょうか, cubeb), 膻肭脐(おっとせい, castrum & civet)の8品目について論述されている。これらが雑纂の下に一括されているのは、商品上の知見——「それは同時に本草博物学的でなければならない」(301頁)とされている——が、原産地における原植物の生育状態を実際に見なければ十分とはいえないが、それらの中には著者がまだ実見されていないものもあること、あるいは原産地から東西両洋に伝播した経路とその消費について、まだわからないところがあり、今後の研究に待たなければならないからであるとされている。しかしそのようにいいながらも、檀香や丁香・肉豆蔻・白豆蔻に関する研究は、かなり詳細にわたっている。

いずれにしても、第一部では『諸蕃志』に記載された南宋時代の輸入香料のすべてに対して、文献学的考察からはじめて、それらの中国および西方への伝来の過程、原産地とその変化、品質、用途、輸送・貿易の状況とその推移など、あらゆる問題がとりあげられ、東西の多くの史料にもとづいて実証的な究明が行われており、そこには旧説に対する鋭い批判と著者独特のユニークな新見解が随所に示されている。もとより史料の制約もあって、単なる推測にとどまらざるをえなかったものも散見はするが、しかしそれらも著者の多年にわたる研究と体験がその裏づけとなっており、今後の研究にとっての貴重な基礎となるものといつてよからう。

III

第二部では日本の沈香が扱われている。著者はすでに『明治前日本応用化学史』(1963年)に「明治前日本香料史」と題して、沈香を中心とした日本香料史を書かれているが、第二部はこれに補筆・修訂を加えられたものと見受けられる。著者は本書に第二部としてこの論考を加えられた意図について、第一部の沈香に関する論考の末尾で、東南アジア諸国人やインド人の沈香使用についての自分の知識がきわめて貧弱であり、また中国人の沈香についても、「彼らの実際の沈香使用についていささか記述に欠けるうらみがないでもない」(209頁)ので、第二部で「中国の焚香の亜流」としての「日本の沈香」をとりあげてその欠を補いたいと述べておられ、また第二部の冒頭でも「中国の香の外延である日本人の香を知ること、中国人の香である沈香を理解する一助であろう」(353頁)と書いておられるところから見て、第二部は第一部の沈香の研究を補うことを目的とされたものであることが知られる。

まず推古天皇の3年に淡路島に沈香木が漂着したことを記した『日本書紀』および『聖徳太子伝暦』の記事が、沈香の日本伝来の最古の記録であるとされて、これらの記録に詳細な検討が加えられ、沈香が仏教の伝来につれて焼香供養の香として伝わったと推定されている。また法隆寺の玉虫厨子に描かれた香炉や焼香供養の図、法隆寺および大安寺の資財帳(747年)の記載などによって、8世紀のころは沈香を中心とし、棧香・薫陸香・白檀が主として焼香用に焚かれたこと、また香炉は唐招提寺や正倉院所蔵のものが示しているように柄香炉が多く使用されたことが知られるが、そこには六朝から唐代にかけての中国の影響が強く見られることが指摘されている。このほか正倉院所蔵の褙衣香や香囊は、衣服・夜具・文書・経巻・身体をかぐわしいものにするために用いられたが、しかし奈良時代には「香と匂いは、まだ色と音に従属し、匂いだけが独立して愛賞され」るところまではいっておらず、「仏教生活をはなれての匂い、すなわち香というものは、まだ存在していなかった」(368~69頁)とされ、当時は香料においても宮廷貴族を中心とし、仏教が支配していたことが明らかにされている。

平安時代に入ると、煉香(れんこう)(ねりこう)、すなわち各種の香料を調剤して粉末にしたものに、梅肉、蜜、甘葛(あまずら)などを混ぜてねりあわせたもの——薫物または炷物と

もいう——を焚いて楽しむ空薫物、薫籠、薫物合が貴族の間に流行するようになり、「色と音と匂いが、それぞれ仏教の束縛から解放されて、宮廷貴族の趣味生活に取り入れられ」ようになったが、「しかしこれらの3つが完全に解放されていたと見ることはできない」(369頁)とされている。

次の鎌倉・室町の武家の社会になると、諸種の香料の中から沈香木だけがとりあげられて焚かれるようになり、「沈香木の発する香気の差異」、すなわち「沈香木の匂いの種々相」「匂いの深さ浅さ」「香気の優劣」を競う遊びがはじまり、こうして沈香木一種の「香気の優劣と相違をくらべて、清澄幽雅な沈香の匂いの中に、幽玄な匂いの世界のあること」(381頁)が知られるようになったとされ、ここに「香道」の発端が見られるとされている。そして武家社会におけるこのような新しい風潮は、「もののあわれにつつまれる薫物より、清楚幽玄で紅袖の気をはらむ、鼻のしびれる沈香の匂いの方が武士の嗜好に合ったからであろう」(384頁)とされるとともに、他方中国から伝来した禅宗の影響の大きかったことが指摘されている。

室町末期からの時代の大きな転換の中で、前代の名香合に代って、新たに組香の遊びがはじまる。すなわち「数種の香木を次々に焚いて、種々の香気の変化を知り」、「香気の変化と組合せの妙を悟る」(389頁)遊びがこれであるが、このような変化が生じた理由として、唐船・南蛮船の来航や朱印船の南方渡海によって、南海の香木の輸入が増加し、優秀な香木が舶載されるようになったこと、国内が統一に向かう時代の雰囲気の中で、幽玄で高踏的な名香合では満足できなくなったことの2つがあげられる。そして組香の発達につれて、匂いの異同を熄ぎわけするための基準として、香道でいう五味と六国が成立してくるとされて、その成立の過程について考察が加えられる。とくに六国(伽羅・羅国・真南蛮・真那賀・佐曾良・寸門多羅)について、従来の香道関係の古書に記されている説は退けられ、それぞれの香の名称からその産地についての追究がなされ、「わが国と南方諸国の関係、そして国内の情勢などから、16世紀の半ばから17世紀の初めにかけて知られ、沈香木の品質を判定する標準として立案されたものであろう」(396頁)との、香料史家としての独創的な見解が述べられている。

最後に江戸時代になると、町人階級の発展によって、香も従来の貴族・僧侶・武士階級の手から解放されて、町人の分野にまで広がるようになり、それに伴って

「過去の香料を使用した化粧品その他が、技術と原料の面から見て可能な限度にまで発達し、都市庶民の間に使用され」(402頁)るようになり、また「香づくし」、「伽羅節」などの歌謡の流行などが見られるようになるが、他方香道の専門家が現われて、御家流、志野流等々の流派が形成され、沈香木の匂いの深さ浅さを求めるよりは、香を聞く形式と作法に終始するようになって、ここに香道は固定化するにいたったことが論じられている。

著者は以上の日本の香料の発展の過程を、第一部の諸論考と同様に、多数の古文獻、その他の資料にもとづいた綿密な考証の上に立って明らかにされているのであって、これを広く東アジアおよび世界の香料史の一環として捕えておられる。この点において「日本沈香志」も多年にわたる著者の香料研究の中からうまれてきた著者独自のユニークな「日本香料史」であるということができ、冒頭に述べた著者の意図は相当に達せられているといつてよからう。

IV

第三部は「肉桂史の研究」で、2つの論文がおさめられている。第一論文は著者が前に発表された「聖書香料植物考(その二)——シンナモンとカッシア——」に補筆・修訂を加え、さらに詳細な注を附せられたものである。シンナモンとカッシア、すなわち肉桂は、インド本土、セイロン、および東南アジアから南シナにかけて分布する樟科系の植物で、インド以西の地域には見られないものである。ところが西方世界では旧新の『聖書』をはじめ、ギリシア、ローマの古典にこの香料に関する記事が見られ、シンナモンとカッシアが古くから使用されていた形跡があり、また古代エジプトでも Punt 方面からこれを入手していたと思われる形跡がある。したがってもし西方の古代のシンナモンとカッシアが、インド以東に産する南アジアの肉桂と同一のものであれば、これらが古代のはるか昔から西方へ送られていたことになるわけである。ところが古代西方のシンナモンとカッシアは、古典作家が「幸福なアラビア」Arabia Felix と呼んだアラビアの南西隅やその対岸のソマリーランドの産——古代エジプトのプントもソマリーランドであると考えられている——であると書かれていて、インドやそれ以東の産とは記されていない。そのため古代西方のシンナモンとカッシアが果たして南アジア産の肉桂であったかどうかをめぐる、さまざまな論議があり、今日なお決

着を見ていない状態にある。第一論文はこの問題を正面からとりあげて、これが南アジア産の肉桂とは異なるものであるとする否定論を、1. ヘロドトスとテオフラストスの肉桂、2. アラビアのサバと肉桂、3. ギリシア人の肉桂、4. 古代インドの肉桂、5. ローマ人の「香料地帯」であったソマリーランド、6. 古代エジプトの肉桂、の6節にわけ、問題と考えられるあらゆる側面からこれを論証されたものである。

まず第1節ではヘロドトスとテオフラストスの記事がとりあげられ、その産地および採取に関する説話について考察され、両者の記事からはシンナモンとカッシアがアラビア南部の産であると彼らが考えていたことが知られるだけであるとされている。

第2節では南アラビアのサバ人の国あるいは対岸のエチオピアに産するとのストラボンの記事および「幸福なアラビア」に産するとのディオドルスの記事がとりあげられ、かれらのいう肉桂が果たしてインド方面から送られてきたものかどうかについて、インド—南アラビア間の海陸の輸送の可能性の面から検討されている。まず海上輸送に関しては、インドとペルシア湾方面の航海は早くから行われていたが、アラビア半島南部沿岸は炎熱の地帯で飲料水にも乏しく、沿岸地帯には造船用の木材も産しないので、当時はまだ普通に航海することはできなかったであろうとの推定がなされている。そしてヘロドトスの伝えるカリュアンダのスキュラックスによる、インダス河からアラビア南岸を周航して紅海に達する航海は、むしろペルシア湾方面への沿岸航海ではなかったろうかとされ、アレクサンドロス大王のアラビア周航計画の失敗も、この方面の航海の困難さを物語るものであるとされている。また陸上輸送の可能性については、インドからペルシア、メソポタミアを経て南アラビアまで輸送されたとすれば、どこかその中継地が産地として伝えられる可能性があるはずであるが、そのようなものは見当たらない、また利にさとい中継民族(アッシリア、フェニキア、ユダヤ、シリア人など)がわざわざ遠隔のサバ人の国からこれを求めるはずはなく、もっと手近の中継地で求めたであろう、ところがアッシリア人はアラビアのオーマン地方からサバの肉桂を求めている(ネアルコスの航海を書いたアッリアノスの記事による)ことから見て、陸上輸送の可能性も考えられないとされている。

第3節ではギリシア人の肉桂が南インド産の肉桂であったかどうか、2つの面から追究されている。ま

ずシンナモンとカッシアという2つの語の語源について考察され、これらはいずれもヘブライ語に由来するものとされ、かつてガルシア・ダ・オルタがカッシアの語源をマレイ語の *kayu-manis*（甘い木、すなわち肉桂）に求めた説が退けられている。次にテオフラストスの『匂いに関する考察』がとりあげられ、この書によって前4～3世紀のギリシア人が、すでに香料をスパイス、コスメチックス、およびインセンスの3つに大別していたことが指摘されるとともに、テオフラストスはシンナモンとカッシアのどちらも香気が辛くて苦みがあり、とくにカッシアの方が苦味が強いと書いていて、そこには「肉桂本来の特徴である爽涼感に溢れる甘味」（423頁）が欠けている、また彼はこの2つの香料をスパイスおよびワインの原料の中にあげていないことが指摘され、結局ヘロドトス以来のシンナモンとカッシアは、ローマ以後のスパイスとして使用されたシンナモンとカッシアとは異質のものではなかったろうかと推定されている。

第4節ではマレイ肉桂やシナ肉桂は古代から中世にかけてインドに伝わった形跡はなく、したがってもし西方に肉桂が伝わったとすればインド肉桂以外には考えられないとされ、次にインドで肉桂を意味するさまざまな語について検討され、これらの語がほとんどすべてインド独自のもので、シンナモンおよびカッシアとは「なんの言語関係の繋がりも持っていない」、また「インドの古い伝承や諸資料に、インドの肉桂が古代のオリエントやギリシアへ転送されていたということを見出すこともできない」（427頁）とされて、インド肉桂が古代のオリエントやギリシアに伝播したとは考えられないと推定されている。

第5節では、ローマ帝制期に入って、ローマの東方貿易が飛躍的に発展し、西方の商人が南アラビアやソマリーランドから、さらにアラビア海を横断してインド方面へ進出したころの肉桂問題がとりあげられている。まずストラボンが南アラビアとともにソマリーランドのガルダフィ岬に近いところをシンナモンの産地としていることが紹介されるとともに、彼の「ある人は、カッシアの大部分はインドから来るといっている」との記事がとりあげられ、これはインド肉桂輸入のはじめての記事であるが、「この事実は一説として簡単に記され、アラビア南部とソマリーランドの産出を否定するような、決定的なものとして特筆されていない」とされて、これをもってインド肉桂が紅海方面へ将来されていた証左と見なすことはできないとされ

ている。しかし同時に「たとえ一説であっても、カッシアの大部分はインドから来るといふ時代は、ストラボン自身の時のことであろう。だから紀元前後のころ、インドの肉桂が輸入されていたのは誤りのない事実であると見られる」と述べられて、ローマ帝制時代に入るとインド肉桂が将来されるようになったことを認めておられるが、「それとともに、古来から南アラビアとソマリーランドに産するという考え方が依然として存し、特にソマリーランドから出るといふ説が大きな部分を前3世紀以来占めている」（428～29頁）と附言されて、産地について従来の考え方が依然として行われていたことが強調されている。しかしストラボンは別のところで、アレクサンドロス大王の東征に従軍したアリストブロースを引いて、インドの南部ではアラビアおよびエチオピアと同様にシンナモンを産すると書いている。したがって、上述のインド肉桂輸入の記事は、あるいは著者のいわれるように紀元前後のころのことを述べたものかも知れないが、すでにヘレニズム時代のはじめにはインド肉桂に関する知識があり、あるいはわずかながらでもインド肉桂が輸入されていたことが考えられるのではなからうか。

この節ではまたプリーニウスの記事がとりあげられ、シンナモンの樹が最高3フィート、カッシアの樹は4フィート内外の灌木であるとの記述について、その樹容の説明から南インドの肉桂樹とは別物のようであることが指摘され、また彼がシンナモンはエチオピア人の国に生育し、これをトロゴダタイ人が近隣の民族から買いとり、筏のようなもので海上を5年もかかって南アラビアのオケーリス港まで運んでくると書いている記事について、「往復5年の日子を要するという彼の説明には、すこぶる不可解なものがある」（430頁）と論評されて、この記事について否定的見解が示されている。しかし5年間の航海を長大な航海というようには解せられないだろうか。もしそうなら、シンナモンが長い航海を重ねてインドからもたらされることを述べたものとも考えることもできるのではなからうか。この節ではさらにジオスコリデス、『案内記』、プトレマイオスの記事についても検討が加えられ、当時西方の商人の交易中心地の一つであったソマリーランドで、「古代からシンナモンとカッシアと称したものと、インドから新しく輸入されかけてきたカッシアとが、この地方のアラビア・ソマリー商人によって、この地帯の産としてローマ人に供給されていたのだろう」とされ、そこにはソマリー・アラビア商人の、商品取扱い

上の奸策ということもあったかも知れないが、当時はなお「東アフリカ産のシンナモンとカッシアと見られるものがあって、それが肉桂の主体（あるいは大部分）」（433頁）を占めていたのであろうとの見解が示されている。

第6節では古代エジプトの肉桂が扱われ、第18王朝のハトシェプスト女王以来、ソマリーランドと考えられるプントからシンナモンとカッシアがもたらされたことが指摘され、それらの用途はヘブライ、ギリシア時代と同様で、やはりスパイスとしては認められないとされている。

以上に述べたように、著者はヘブライ、ギリシア、さらに古代エジプトのシンナモンとカッシアは、スパイスとして使用されたものではなく、その産地も結局ソマリーランドと考えられ、インド以东の「爽涼感に溢れる甘味」をもった肉桂とは別のものである、ようやくローマ帝制期に入ってインド貿易が盛大となるにつれて、インド肉桂がソマリーランド産のものとともにソマリーランドの市場から輸入されるようになり、スパイスとして利用されるようになったことを、さまざまな面から、きわめて綿密かつ用意周到に論証されている。

第一論文にはさらに「(附) 二つの疑問」が末尾に掲げられている。これはもとの論文にはなかったもので、本書に収録されるに当たって附加されたものであるが、これはかつて私が「西方世界とインド洋貿易(3)」(『流通経済論集』第7巻3号)の中で、著者の論証に関連して述べた疑問に対する解答である。著者はこの中で拙論を引用されながら、詳細にわたって私の疑問に懇切な解答を与えられており、著者の御好情に対して厚く感謝申しあげたい。

ところで私は拙論の中で著者に対して2つの疑問を提出した。1つはアラビア半島南部沿岸の航海は、著者が考えておられるよりももっと以前にさかのぼるのではないか、アラビア人やインド人はもっと早くからこの方面で海上貿易活動を行っていたのではなかろうかということである。著者はこれに対して、インド船が紅海の入口方面まで来航するようになったのは、「前2世紀のアガタルキデスがサバの近くに『幸福な島々』をあげ、インダス河口のポターナから船がやってくる、と書いている頃よりあまりさかのぼらない時代」のことであろうとされ、またアラビア人が「インド本土の物資を求めるため、積極的に渡海するようになった」のも、ほぼそのころからであろうとされ、それは「前

2世紀をそう古くさかのぼらない頃」(440頁)のことと考えたいと述べておられる。私が提出した第2の疑問は、西方の商人が直接インドにおもむくようになった紀元前後になると、インド肉桂もソマリーランドに送られて、ソマリーランド産のものといっしょに西方商人に売られたとの著者の所説に対するもので、インドにおもむいた西方の商人がなぜインドに肉桂を産することに気づかなかったのか、またなぜ肉桂だけがソマリーランドまで運ばれて、そこでソマリーランド産のものといっしょに売られたのか、インド肉桂が「爽涼感に溢れる甘味」を持っていたとすれば、西方の商人には両者の識別ができたのではなかろうか、という疑問である。著者はこれに対して「現在の植物学と生薬学の研究からしても、実際に肉桂種を薬用・調味料に使用する側からすれば、その実体はわからない方が多い」と述べられて、肉桂種の識別の困難さを強調され、「まして紀元前後のことである」から、その識別はいっそう困難であったろうということを言外に示唆しておられる。そして古典作家の説明からすれば、ソマリーランドで取引されたシンナモンとカッシアはインド肉桂とは別種の植物のようであり、ただ「植物成分の点で、アジア肉桂に似たなものか含有していたのだろう」とされて、この植物が「ソマリーランドとその奥地にあったのだろうと推定する以外に手がかりはない」(442頁)と述べておられる。さらに私は第2の疑問と関連して、著者の所説に「大いに心をひかれるものがあるが」「従来から説かれている貿易の秘密や独占」になお解答を求めたい気持があると述べて、この有利な商品を独占しようとしてインドやアラビアの商人がその産地を秘密にしていたのではないか、また肉桂はきわめて高価な商品ゆえ、支配者による統制や独占の措置が講ぜられたのではなかろうかとの推測を述べた。著者はこれに対して、肉桂はローマでは高価であっても、原産地のインドでは決して高価なものではなかったと考えられることを、14世紀のセイロン島の肉桂の場合などを例にして指摘され、したがってその輸出について「たとえ支配者の許諾が必要であったとしても、それは厳重な統制支配というほどのものではなかったろう」とされ、「この謎は、肉桂がローマで高価であったことと、ソマリー・アラビア商人たちの商業取引上の秘密だけでは解決されない」(443～44頁)と私の疑問に対して答えておられる。

著者は私の幼稚かつ素朴な疑問をとりあげられて、以上のような解答を与えられたのであるが、私として

はなお若干の疑念が残るように思われる。たしかに著者がいわれるように、アラビア半島南部沿岸の自然環境は、航海の条件としてはきわめて劣悪であるといつてよいし、またその沿海を通してインドーアラビア間の航海が行われたということを示す早期の徴証も、著者が否定的に考えておられるスキュラックスの航海以外見当らないようである。しかしスキュラックスの周航について、インドとペルシア湾方面との航海が早くから開けていたというだけで、これをペルシア湾方面への航海と推定されることは、いささか早急のように思われる。近年ペルシア湾方面においては考古学的調査・発掘に若干の進展が見られ、バーレン島の発掘をはじめとして、アラビア側沿岸でもオーマンなどでメソポタミア方面との関係を示す早期の土器が発見されており、ペルシア湾ではすでに紀元前3千年紀の半ば、もしくはそれ以前から航海が行われ、インダス文明地帯との交渉も行われていた証跡が見出されている。アラビア南部沿岸では、まだそのような調査・発掘が行われていないようであるから、遺憾ながらこの方面の早期の航海についてはなんともいえないが、南アラビア人が早くからソマリーランドやさらに南方のアフリカ東岸方面との間に海上通商を行っていたことは、『案内記』のこの方面の記述から考えられるところであり、またこの書には乳香産地からその輸出港であるカネーまで、この地方特有の皮袋で作った筏や船で乳香が送られるという記述があり、このような原始的な筏は、この書が書かれた紀元1世紀の後半よりはずっと以前から使用されていたという印象を受ける。また『案内記』にはアデンが以前にはインド商人とエジプトからくる商人との取引地であったことが記されている。エジプト商人がいつごろアデンまで進出するようになったかはわからないが、プトレマイオス朝のエウエルゲテス2世（前145～116在位）の治世には紅海方面への進出が積極的に推進されており、この王の治世の末期にはキュジクスのエウドクソスのインドへの航海が行われたことが、ストラボンによって伝えられている。こうしたプトレマイオス朝の進出は、エジプト商人のこの方面への活動を促進したであろうが、彼らの進出はおそらくアラビア商人との競争の中で後者による妨害を排除して行われなければならなかったのではなかろうか。このことは同じく『案内記』のアデン征服の記事から推測することができるのではなかろうか。このように考えれば、エジプト商人が進出してくる以前には、アラビア商人の海上活動が行われて

いた、あるいはまた彼らがインド商人と交易を行っていたと想定することは、可能ではなかろうか。しかしこの想定を裏づけしてくれる明確な徴証は残念ながらない。今後この方面の考古学や碑文学の調査・研究がこの問題の解明に寄与してくれることを期待するものである。

次に肉桂の品種識別の困難さについては、著者の多年にわたる香料研究をふまえた見解として、まことに貴重なものと考えられる。また貿易の秘密や支配者による統制、それに価額の問題についても、著者の見解に相当の説得性があるように思われるが、古代の遠隔地貿易にあっては、その理由はさまざまのものがあろうが、商人による秘密の保持や支配者による統制・独占は、それほど珍しいことではなかったのではなかろうか。また著者も認めておられるように、ローマ時代に入ると、ソマリーランド産のシンナモンとカシヤとともに、インド肉桂がソマリーランドの市場で取引されたとすれば、やはり肉桂だけがなぜインドで直接取引されずに、わざわざソマリーランドまで運ばれて、そこで西方の商人に売られなければならなかったのかという謎は、依然として解明されないように思われる。

肉桂の問題はいままで多くの研究者を悩ましてきたものである。著者はこれに対して、古典古代のシンナモンとカシヤが南アジア産の肉桂ではなく、その実体は明らかではないが、ソマリーランドもしくはその奥地の植物の所産であろうとの推定を立てられ、これを史料の綿密・周到な検討にもとづいて、さまざまな側面から論証された。私は著者の主張に対して、細部の点に関してなお若干の疑問や私見を述べてみたが、著者の研究はもとよりこれによっていささかも損われるものではなく、肉桂史の謎の解明に大きな寄与をなすものといつてよかろう。なお著者は本書刊行の直前に、さらに「東西交通史上の肉桂」を発表されている。この論文は、著者が敬愛されている故岡本良知氏の遺稿に詳細な補注を施されたものであるが、この論文の末尾でも私の疑問をとりあげられ、解答を与えて下さった。しかしそれは本書の論考と趣旨において大差ないように見受けられるので、ここではそのことを附記するだけにとどめたい。

第二論文は、ペルシア語でダール・チーニーすなわち「シナの木」と呼ばれる肉桂が、通常考えられているように、中国産の肉桂ではなく、インド産、そして後世はこれにマレイ産の肉桂が加わったものであり、中国産の肉桂は近世にいたるまで西方へ輸出されるこ

とがなかったことを、論証されたものである。すでに予定の紙数を大幅にオーバーしてしまったので、その内容を詳細に紹介することはさし控えるが、著者はこの問題に言語および文献の上から詳細に考察を加えておられる。すなわちこの語はもともと中世ペルシア語に発するもので、これがアラビア語に輸入され、さらにイスラム勢力のインド進出に伴って、インド各地にこの系統の語が拡まったものであること、cin という語は中世ペルシア語の文献にしばしば見られるが、それは大体今日のサマルカンド地方あたりを指していると考えられ、13世紀の文献にはじめて中国本土を指す用例が見られるのであって、ダール・チーニーのチーニーは漠然と東の方から来るものを指す語として用いられていると考えられること、そのほかさまざまな問題について考察されており、中国産の肉桂についても、それがほとんど外界へ輸出されることがなかったことが、詳細に論じられている。

V

以上、500 頁をこえる著者の大冊に対して、重要と思われる論考のうちのいくつかをとりあげ、多少の疑問や私見を交えながら、紹介を試みた。しかし本書の内容はきわめて複雑多岐にわたっており、無数の文献資料を縦横に駆使されて精細な論証が展開されているのであって、果たして著者の意図されたところを正確に伝えることができたかどうか、まことに心もとない

ものがある。あるいは重大な誤解を犯しているところも多いのではないか、また著者が重要とされているところを多数見落しているのではないかと恐れるものである。この点について、またしばしば蕪辞をろうしたことについて、著者の寛大な宥恕を請うものである。それに私は南海を通じる東西交渉史に関心を持っているが、私がこれまで主としてやってきたことは、インド以西にとどまり、東南アジアや中国に関しては、まったくの門外漢である。そのため本書の大部分を占める第一部および第二部については、批判を加えることなどどうていなしうことなく、ほとんど著者の論旨を追うことだけに終始せざるをえなかったのであって、私の浅学と不勉強はまことに慙愧に堪えない。

それにしても、香料史の研究は、史料の制約もあり、研究者のすくないこともあって、なお解明されない問題が多々あるようである。文字通り香料史の専門家である著者でさえ、本書の中で「このことについてはわからない」とか「よくわからない」と時折述べておられるのである。本書はこのような困難な分野に多年にわたって取り組んでこられた著者の、文字通りライフ・ワークであって、随所に著者でなければ考えられない独自のユニークな新見解が示されており、香料史および東西交渉史の研究に大きな寄与をなすものといつてよからう。著者が今後いつその精進を重ねられ、さらに一段と研究を促進されることを祈念するものである。